



住民の自治機運を削ぐ行政であってはならぬ 町の回覧板は、地域の人のも

今年3月末、尾道航路存続連絡協議会副会長を務める下町削区長が役員総務課長に呼ばれ「町の掲示板に私的な掲示物を貼るな」と注意されたという。若者が貼っていたと言いが誰か?と。

特定の団体を狙い撃つ
 その掲示物とは本年3月9日、尾道弓削航路存続を求める陳情署名の提出(陳情者代表濱村隆氏、浜田光氏)が上町町長に成された事を受け、「尾道ー弓削航路存続を求める署名結果のご報告」として、陳情者代表名で、その提出した事実を報道した新聞記事(3月10日付け愛媛新聞)と、1,890名の署名が集まり町長から現行の運航会社、議会、公共交通審議会、陳情者代表を含めた会談の場」を持ちたいとの回答があった事実を伝えるA4版の掲示物。

掲示は陳情者代表の名でされたところから考えると、どうも誰かの意向を受けた狙い撃ちのようである。

地域の自治活動の充実を謳う町 歴史は繰り返す

昔、弓削町時代の平成4年「広報ゆげ5月号」にこういう記事が掲載された。

お願い
 町の掲示板へ最近私的な掲示物がよく貼られています。公共の掲示板への私的な掲示物については遠慮ください。

これに対して弓削通信5月号にこういう記事を書いた。

『町の』掲示板へ私的な掲示物を貼るなど広報5月号で町民はお願いされた。会葬御礼や、お知らせなど町民にだって他人の運に伝えないメッセージはある。誰にでも利用できる掲示板があるのなら、畏れ多くもお上の場所には貼りません。『町の』ものは誰のもの? 妙なお願いするよりも『町の掲示板』として充分働かせたらどうですか。



町の掲示板は誰のもの?

上から下まで一貫した意識
 「町の掲示板」についてだが、そもそも町のモノは誰のモノかと考えれば道理のわかった納税者にとっては答えは明らかだろう。役場の所有物でもなく、ましてや首長の私有物でもない。町内各地の掲示板は、行政側からの情報を掲示するために作ったのは確かだが、告示や公示

住民自治を否定するのか
 この署名集めに關しては、同航路が町民にとつて極めて重要であるところから、署名の集め方について区長主催の地区長会で協議された結果、各地区の回覧板をつかかって集めようと決定、当然の事として署名は自主的、任意という事で弓削、佐島地区では実行された。

一方生名地区では、区長判断により有志による収集となった経緯と聞く。

先月来町内で開催されている上町町長の後援会集會や、地区集會でもこの署名集めに關し、町の回覧組織を使つたと批判が出たそうだがこの、「町の」という意識には改めて驚きを禁じ得ない。

うに、首長の縁戚関係者のならOKなのか?
 こうしてみると、役場職員の方では20年来一貫して変わって居ないらしい。まあ、それはそれで立派なものだとは言えるのかも知れないが...

学ばぬゆえ変わらぬ意識
 町の回覧組織についてはさらに奇つ怪な意識だ。

各地区には行政からのお知らせなどを各戸に配布したりする

のための特別に設けている掲示板ではない雨ざらしの掲示板の空きスペースを、町民がささやかな情報発信に利用することになぜかなく目くじらを立てる? その為に行政側の掲示が出来なくなっているのか?
 では今回のように、町民に向けての陳情署名の結果報告はダメで、ここにある例示写真のよ

知人の葬儀に出席するため、妹夫婦が帰省した。余りの寒さに私の一張羅のコートを貸そうという事に。
 「汚したら悪いから」とおつちよこちよりの妹が言うのと、夫が「風邪ひくよりいい!」と襟元に毛のついたコートを着ると「令夫人みたい!」と妹がはしゃぎ「黙っていたらな」と義弟。大騒ぎしながら出かけた。夕方、「あーほんま寒かった。トイレ借りるわ」と賑やかに帰ってきた。「義兄ちゃん言う通り借りてよかった。本当ありが

行政の下請けではない
 住民自治というのは、住民自らが自分たちの生活を守るための行動であり、逆にそれがあからこそ行政職員が安心して施策推進に取り組めるのだ。こう

ために広報委員というのがいて、地区役員が兼ねているのが通常。しかし回覧行為に關しては、地区役員(広報委員)が各戸を回る仕組みの所もあれば、順に手渡しで回覧する所もある。その地区の事情に応じて地区住民が協議し採用しているまちまちの形態である。これは住民自治のひとつの現れである。

広報委員等には行政側からなにがしかの担当がでるが、職員に成り代わっての作業である。手当を出してあたりまえ。しかも委嘱されたことを滞りなく果たしている以上、地区ごとの仕組みを使って住民が、自らの情報をやりとりするの何の不都合があるというのか。

と気づかぬの出来る人になったんだ。
 なんだかうれしくなった。タイムングよく「義姉ちゃんの入れるコーヒーはなんでおいしいんかね」と義弟がほめるもんだから、コーヒー豆やいろいろ持たせた。

ひと騒ぎの後、夫と夕食を済ませ、ふとポケットの中が気になった。そこへ妹から「今着いたよ。いろいろありがと。義兄ちゃんよろしくね。そうそう、ポケットの中に防虫剤が入ってたけど、取り替えた方がいいよ。言うの忘れてたワ」

電話を切りポケットの中に手を入れると、お・わ・り、と白い文字が浮かんだ防虫シートが出て来た。



「自分たちの地域のことは、自分たちで決め自分たちの知識と力で実行する。それが地域自治の基本である。」と謳っている。先の回覧板に關する意識と言いつ、回覧組織という意識と言いつ、この20年、官も民もいつたい何を学んできたのだろうか。

町民側に立たぬ職員なら削減
 役場は僻地の最大の就労の場として、今まで職員削減には慎重な気持ちでいた筆者も、その考えを撤回し、町民の側に立たぬのなら職員数を減らせろ!と声高に叫ぶ側に回らねばならぬ時期に来たのかも知れない。(平山和昭)

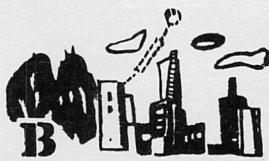
という仕組みは「回覧組織」などという「組織」ではなく、住民の住民による情報伝達手段のひとつにすぎず、いくばくかの手当を出しているからと言って「町のもの」などと思ふのならとんでもない勘違いだ。

町は町づくり総合計画(上島町元氣アップ計画)で「島は自治人」と位置づけ、

と気づかぬの出来る人になったんだ。
 なんだかうれしくなった。タイムングよく「義姉ちゃんの入れるコーヒーはなんでおいしいんかね」と義弟がほめるもんだから、コーヒー豆やいろいろ持たせた。

ひと騒ぎの後、夫と夕食を済ませ、ふとポケットの中が気になった。そこへ妹から「今着いたよ。いろいろありがと。義兄ちゃんよろしくね。そうそう、ポケットの中に防虫剤が入ってたけど、取り替えた方がいいよ。言うの忘れてたワ」

電話を切りポケットの中に手を入れると、お・わ・り、と白い文字が浮かんだ防虫シートが出て来た。



◎お見事、G・C・D!

4月8日から2週間、弓削島の松原・弓削神社、中都地区のやよみ亭で村上宏治写真展が開催されている。殊に松原での展示は全て屋外。風雨にさらされるなか、写真家の作品が大自然の中で存在感を示せるかどうか。日本でもほとんど成功例がないと言われる展覧会である。

展示作業には我が町のNPOグリーン・キャンドウ(G・C・D)が取り組んだ。延べ四十名ほどの会員が写真家の意気を感じ、開会前々日と前日にわたりボランティアで見事設営を果たした。同会は松原松保安全グループだが、自分たちの町を活性化するため汗を流すこうした活動こそ住民自治の鏡だと感銘した。

第16回 因島自由大学

2011年3月11日に東日本で起こった大地震と津波によって原子力発電所の安全神話は崩壊した。ノンフィクション作家の第一人者による実態が今ここに明らかになる。



ノンフィクション作家 佐野真一先生

1947年(昭和22年)東京生まれ。早稲田大学文学部卒業後、出版社勤務を経てノンフィクション作家に。綿密な取材によってわが国の近現代の光と影に肉迫する作品を書き続けている。1997(平成9)年、民俗学者宮本常一と渋沢敬三の生涯を描いた『旅する巨人』で第28回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。2009年、『甘粕正彦 乱心の戦野』で第31回講談社ノンフィクション賞受賞。著書に『遠い「山びこ」 無着成恭と教え子たちの四十年』『巨怪伝—正力松太郎と影武者たちの一世紀』『カリスマー—中内功とダイエーの「戦後」』『東電OL殺人事件』『東電OL症候群』『だれが「本」を殺すのか』『宮本常一が見た日本』『小泉政権—非常の歲月』『阿片王—満州の夜と霧』『沖縄—だれにも書かれなかった戦後史』『昭和の終わりと黄昏れニッポン』『津波と原発』など多数。

お話

津波と原発

- とき 2012年5月19日(土) 午後2時~4時
- ところ 芸予文化情報センター (尾道市因島土生町100-4 TEL 0845-22-8660)
- 学費 2,000円

★電話での問い合わせ: 0845-22-5382 (永宗)
★事務局住所: 広島県尾道市因島田熊町中央区1087-1

★弓削問い合わせ先
弓削通信(77-3072)

「出よう会」はじめます

5月から、みなさまのおそばで気軽に集える「出よう会」を始めます。あまり外出なさらない方も、ご近所どうし集まってお話ししたり、お茶とお菓いでティータイムを楽しみませんか。

- 1, 中都やよみ亭 5月8日(火)
(毎月第2火曜日)
- 2, 土生集会所 5月15日(火)
(毎月第3火曜日)

時間は午後1時~3時

★どちらかお近くへお出かけ下さい。

世話人: 平山久子 (77-3072)
白玉智早子 (77-3413)
事務局: NPO 頼れるふるさとネット (72-9188)

みなさまのおいでをお待ちしています。

やよみ亭映画研究会 無料

4月15日。夜7時から どなたでも観きにどうぞ

●2005年4月6日、大学を卒業したばかりの従兄弟ジェイミー・マッケンジー(当時27歳)とベン・ウィルソン(当時25歳)はイギリスを旅立ち自転車だけで7大陸を走破する3年に及ぶ旅を始めた。彼らは、今しかできないという焦燥感をバネに、大きな夢を実現させようとしていた。

問い合わせ: 0897-72-9188



高須賀 優 弓削島作品展

4月8日(日)から・やよみ亭

伊豆高原アートフェスティバル出展のため、弓削中都「やよみ亭」に滞在し油絵制作を続けておられる画家・高須賀優氏の作品および製作過程の見学ができます。

経歴 愛媛県生まれ。東京在住。装丁・イラストの仕事に従事する傍ら個展などで絵を発表。30数年前、たまたまあるサーカス団でペンキ塗りやポスター制作等を手伝ったことからサーカスに興味を持つ。2005年頃よりブリキやカンカンに油絵を描きはじめる現在に至る。(氏のhpより)

●出版 『曲芸お伽草子』2011年 鶴書院



第1回来町製作時(3月21日~31日)の作品公開。やよみ亭離れ。向かって左が高須賀優氏。写真:古川優哉。

初夏の風吹く

安藤朋生 茨城県



那覇から戻ると関東は寒かった。がっかりなのは帰路の距離。羽田から茨城のつくばターミナルまでは約2時間。そこから車で40分。やっと我が家へ到着。帰宅した途端、疲れがどっと押し寄せバタンキューである。

那覇から首里城、首里城から美ら海水族館へと北上し、毎日

海に見える道路をドライブした。いつも通り私と娘は写真をバシバシ撮り、父母弟らは静かにその場を観察。旅行に来ている臨場感の低いことこの上なく、やっとテンションが上がりだしたのはお土産を買う時になってから。

ちんすこうはまあいいやと鼻から相手にせず、シーサーと紅芋タルトをガンガン買った。琉球村だけにそんな格好の綺麗なお姉さんが、合計

金額でお菓子の掴み取りが3回出来るよと言うので一同テンション上がるが、掴む菓子はちんすこうであった。でもまあやるなら大きく取ろうじゃないかと弟を投入。後に父と娘が続き結構な量を頂いた。おまけとお姉さんが軽く一掴み入れてくれたのを太っ腹と笑ったのも束の間、私達はちんすこうが苦手だった。というか美味くない(失礼)。でもと思ひ母と

食べてみることに。美味いじゃないか!びっくりした。美味しくなってる。茨城に帰ってから後悔したのは言うまでもない。

気温差が旅の思いを深いものにしていく。タクシーと住居がひしめく那覇は何かか思い描いていたものとは違っていた。毎日途切れることのない観光客。

島でありながら島らしくない沖縄。割り切り融合するその力は、たくましく見習うべき点だと思った。

